

色彩語彙分析のあり方

長 野 泰 彦

-
- | | |
|-------------------------|-------------------|
| 1. はじめに | 5. バーリンとケイの仮説 |
| 2. 言葉と認識——言語における相対論と普遍論 | 6. チベット語色彩語彙の記述 |
| 3. 色の属性とその調査方法 | 7. チベット語色彩語彙体系の分析 |
| 4. 色彩語彙の先行研究概要 | 8. む す び |
-

論文要旨

小稿は、色彩を言葉を手がかりとして研究する基礎として、言語学の語義論 (lexical semantics) の立場からみた色彩語彙 (color terms) 分析理論の概略とその問題点、及び、チベット語についての事例研究の結果を示すことを目的としている。

色彩の認識を言語に現れた形式から探究しようとする場合、言語と認識の関係をどう捉えるかがまず問題となるが、ここでは、言語普遍論 (linguistic universalism) の立場に立ち、言語相対論のそれはとらない。

次に、色彩語彙に関する従前の研究を概観し、アリストテレスから近年のバーリン & ケイ (Berlin & Kay) の理論までを紹介する。また、日本における色彩語彙研究のうち、佐竹論文は方法的にきわめて優れているので、やや詳しくその論点をまとめた。

1970年以降の色彩語彙研究にある種の基準を提供したバーリン & ケイの理論は多くの批判にも拘らず重要であるので、詳細にその理論と方法を紹介し、方法論上の問題点と具体的な分析におけるそれをあわせて述べる。

最後に、筆者の専攻するチベット語の色彩語彙の記述と、その構造分析を示す。まず、色票による調査結果とその語義を検討し、歴史的来源を確定した上、基本的色彩語彙をふるい分ける基準を提唱する。また、複合語の場合、そこに働いている統語論理も記述する。

次に、それらの語彙群がどのような構造になっているのかを探る。これには複合語の構成論理をも含めて考察する。その結果、チベット語の色彩語彙には色相 (hue) を表すと同時に、明度 (brightness) や純度 (saturation) を示すものがあることが分かる。

また、語彙がより基本的である度合いを形態論的に規定する基準がありうることを証明し、これによってチベット語色彩語彙の歴史的発展 (evolution) を跡づけようとする。